

# 旅のそとそと

滿洲 瓦房店 田中美枝子

毎年行き度いくと思つてゐました東京へ今年やつこ出て参りまして本當に嬉しうございましたが、寄宿舎でも講習場でも、ごちからから聞かれますので瓦房店に申しましたも御存じない處ですから滿洲に申します、皆ほうご驚いてそれから感心なさるまではよろしいのですけれど、其の後が中には随分さんちんかな事をお尋ね下さるので、初めの中は返事に困ることもございました。幾度もさう云ふことに會ひましたので、――滿洲の幼稚園つて支那人の子ですか、支那人も一緒ですか、日本人も居るのですかな、日本の幼稚園は日本の子供だけ云ふことを申し上げて置きます。内地の幼稚園も何も變りはございませんの。

それから支那人でなくて滿洲國の人は滿洲人です。私の居ります處は小さい處ですから幼稚園も一つしかございませんが、大きい都會には幾つもありましてそれでも四月には入園希望者の方がすつと多くて入れない子が澤山出来るのです。

瓦房店は滿洲の小學校幼稚園の中で一番環境の良い處だ

さうで、自然に恵まれた實によい處ですが、大連に近いので都會の空氣に觸れることも出来ずし不足はございません。

東京の寄宿舎では本當に面白い愉快な一週であつた。附屬幼稚園のSさんの事が大變な評判で、私達これから皆あの先生の様に何時もにこくしてゐませうよ云つて居るのよ、ご大阪さんが仰言る、でもさうしてあんなに何時もにこくしてゐられるのでせうね。ご神戸さんが首を傾ける。もごく同級生の私は、そうはいはないが、そつと得意で、何しろ何處の室でも噂高く、Sさんは講習生一部の憧敬的であつた。

東京へ来てバーマネットの若い方の口から、あの大阪言葉聞いた時には何か變な氣がしたけれど、大阪の方達とお話してゐる中に、私も遣つて見度くなつた。大阪の伯父達は三年前に北海道から移つて來たのだが、伯母は相變らず秋田辯で、一人娘の和子だけが大阪言葉、前北海道に行つた時には、他から歸つて來てあゝこわいなご、云ふので

まごつかされたのが、今ではあゝしんまごすましてゐる。

子供は早いもの一月もせぬ中に、駄目やわごかあかへんごか、言ひはつたんですわご云つてゐるのさ伯母が笑ふ。私も其の中何時の間にか、アクセントが大坂言葉になつてゐるのに話す後から氣がついて、一人で可笑しくなつた。

汽車の中で若い背廣の男の人達が、〇〇ですわなごゝ話してゐるので、皆やさしい人の様な氣がしたけれど、大坂驛に着いた時は實際物凄いの胆を潰されて了つた。私が一番後になつたのだが、デッキの段を一段踏んだきり、わいゝ押寄せた人達で一步も進めぬ。降りようとするのに相手構はず乗り込まうとするので、三度ばかり後へ倒れ掛つたのを、やつご提げて居たトランクで支へたのだが、力を出して頑張らなければ、危ふく踏み潰されるごころであつた。實に必死の思ひをしたが、腹も立つた。満人の苦力でさへ列を作つて待つてゐるんだのにご情けない思ひであつた。やつご一人の方が引張り出して助けて下さつたが、一番乗りをしようとしてゐたシャツに腹巻だけの汗臭い男は、降りるならさつご降りろご怒鳴つたので、あゝ大坂は嫌なごころだなご思つて了ふ。大坂へ四泊して五日目の晩富士で發つたが、驛へ来てホームの汚いのに驚く。出征される方達を送つた後だつたらしいご。サイダーの空瓶ご箸ご折ご紙ごが一杯に散らされてゐる。

列車が入つて来るご案内係の放送が、皆さん列車の飛び乗りは危険ですから、待つてから靜かにお乗りを願ひます、ご云つてゐる。さすが大坂だけあつてこんなごまで御注意下さるんだなご思ふ。だから奉天へ着いて、ホームの人達が眞中を空けて入口の兩側へ列んでゐるのを見た時は、ごても嬉しい氣がした。

大坂のごさばかり言つてすまないけれど、大坂が一番暑い様な氣がしてゐる、まだ奉天も暑いご云へば暑いけれど吹く風は涼しく眞夏の暑さではない、生温かつた水道の水が、もう冷い程になつてゐる。満洲は北の方程早く暑くなるので新京なごは夏休みが七月初めからご云ふごさだ。内地に居る間、夜になるご満洲がいゝなご思つた。夜にならなくても、晝間から蚊に攻められるには閉口をした。北海道の室蘭から登別温泉まで行つたが、此處には蚊がまるせんご宣傳してあつた。室蘭へ降りた時はもう夜になつてゐて、肌が粟立ち寒い程であつたけれど、それでも此の日は今までご一番暑くて八十二度にも昇つたのですよ、屹度今年のレコードでせうご云ふ話である。姉はセルの上に袷羽織を着て迎へに出て呉れた。

北海道のアイヌの家は、これから一切建てゝはいけなごごになつたのださうで、其を記念する爲に、新しく建てたのだご云ふのが登別驛の傍に出来てゐて、觀覽料大人一

人二十錢さかゝりて白老から来た人が種々説明をしてゐる。細工をする人も一緒に居てやつてゐるが、前白老にいたつた時見た物の方がすつゝ立派だつた様に思ふ。

小さい甥姪達には、初めて會つたのだが、時々言葉が分らなくて困つた。可愛い事をめんこい云ひ、いたまじい云ふのは惜しいこゝで、よく〇〇するだべか云ふ、私が聞き返す〇〇するのでせう？云ひ難くさうに云ひ直す。室蘭を立つ時は姉が立つ先きの東室蘭まで送つてくれたが、前に坐つてゐた田舎の小母さんが私のスカートを揃んで、近頃は妙なものが流行るの、内の娘が満洲さ行つて寫眞撮つてよこしたが、これと同じ物着てよこんでころをおつちめての、ミ袖口まで引張るので、此の人も満洲から来たのですよ、姉が云ふミ、うそだべかミ眼を圓くして大きな聲を出す。私が本當ですよ云ふミ、今度は小さい聲で、さうかね、ミ顔を寄せ、満洲はいゝミこだつてなあミ懐しさう。満洲へなき行くミ夢にも思はないでお嫁にやつたのだがミ、それから次々ミ話かけ、誰か乗つて来るミ一々此の人満洲から來なかつたてよミ告げる。後から弟が、一人でまくしたて、居たぢやないかミ笑つたけれど、田舎の人ミお話するのは面白いから、小母さん達ミはよく話す。長萬部で乗り換へてからは、大泊から乗つたミ云ふ人の隣へ掛けたが、この小母さんは自分の娘さんに敬

語をつかつて話すので可笑しかつたけれど、神妙にきいて居た。二番目の娘さんの結婚寫眞を袋の中から取り出して、裏に名前をかいてくれませんか云ふ。お婿さんの姓名は字を知らないが、さう書くのかミ聞かれるけれど、私も初めて聞く珍しい名前なので分らない云ふミ、ぢや年だけかいさいて下さい云ふ。末の娘さんは何處さかへ勤めてゐるのだけれき、満洲に居るお友達から手紙が來たら、このお母さんが留守の間にでも満洲へ行く云つてゐるのですよ、ミ笑つて話すので、随分呑氣なお母さんだなミ思ふ。

靜岡で三日遊んで、大阪へ下る道中では、慶應二年生れの、七十三だが、何時も十位若く云つてゐるのださ、總入齒をがちく云はせて物を言ふ元氣なお爺さんミ向ひ合つて、私も日清戦争、日露戦争の時満洲に行つた、ミそれから長々ミ戦争の手柄話を聞かされた。自分は寅年だから向ふ見ずな勇敢なミところがあるのだ云ひ、私の年を聞いて二十五の寅ミ分るミ、寅でも五黄の寅ミか云ふのは何ミか云ひますな、ミ云ひ出したので、私はその五黄の寅ですよミ押へて了ふ、ふーむ、さうか、ミ私の顔を氣味の悪い程みつめ、貴女は矢張りきかんミところがあるなミ云つて笑はせられる。何やら随分種々話した末には、私の會社へ來なさい、月給五十圓、手當五十圓で月百圓上げるから、ミ

うですかみ頻りに云ふ。私が貴女を誘拐するのだと思ふながら、ミ経歴書を鞆の中から出したるなるので、のぞいて見るミ、山陽製鋼の顧問ミ云ふ方である。お爺さんだから思つて我慢して、急行列車の中で聞き取れないミころも一生懸命になつて返事をしてるたのだけれど、餘り口説かれて面倒になつて了つた。横の席が空いた時其方へ移つたが、お爺さんは岐阜で下りがけに又、繰り返し、何時でも電話を掛ける様にさまで言ひ置いて、ぢや御大事にミ帽子を振つて行かれた。男の人でも若さうな人ミ乗り合せた時には、お互に口をきかぬことが多く、窓から飽かず景色を眺めて過す。内地ではトンネルの澤山あるのが煩しくて、滿洲へ歸つて来て廣々した處を走つてゐるミ、何ミなく伸び／＼する様な氣持になる。

關釜連絡船も、青函連絡船も、往きはよいよい復りは恐い、であつた。下關から乗つた時が、一番搖れて、氣持の悪さを忘れる爲に眠り度いと思つても、眠れないので、もう三十分経つたかミ時計を見るミ五分しか過ぎてない程、時間の經つのが待遠しかつた、其の中歌を歌ふミを思ひついた。胸苦しさに呻く時、節をつけて小さい聲でうなつて居る中眠つて了つて、覺めた時は着陸前であつた。この催眠術は實によく效く。聲を出してもよいし、口の中でよい、何か歌つてゐるミ私は必ず直ぐ眠れるのである。

青函船では、邊り構はずべつ／＼吐き散らす爺がゐるぞつミさせられた、マイクを通じて連絡時刻の案内をしてくれてゐる最中に、大聲でボーイ、ボーイミ怒鳴つたりする。愈々着いて娘さんが起たうミするミ、何を慌てくさる。急いで下りるのは田舎ものするこつちやミ叱つて、又かあーミ番茶で嗽したのを近所一面に吐き散らすのだ。きつミ誰も居なくなつてから、俺は紳士ぢやミ横柄に出て來るこゝであらう。長萬部で乗換へた時も、一人窓から涕をすつては、ホームへ吐き飛ばす男がゐるて、驛員さんは睨みながら通るのに黙つてゐるので、注意して呉れたらよいのにと思ふ。滿人でさへ列車の中では痰壺に吐くこゝを知つてゐるのにと思ふ。列車の中の汚さは、何處も同じだけれど、もつミ各々が氣をつけて、綺麗にして置ける様になるのは何時の事かと思ふ。遠足なミに行つた時も、子供には後に紙屑を残さぬ様にミ注意してゐても、家庭の人ミ一緒の時

は親から散らして行くのが多いのだから。――  
十六日の夜十一時二十五分に大阪を發つて、奉天へ十八日の午後五時二十分に到着。翌朝新京から母が來てくれて、十五日の夜までも變な夢を見たので、病氣でもして居るのぢやないかミ心配して居たのミ仰言るので、それはさうも、ミ笑つたけれど、何時も心配して下さる母の有難さ

を思ふ。(八五頁へつゞく)

恐ろしい顔になつたこゝ、挨拶をしても返事もしないこゝ、そしてみんなは一樣に、あの子は逃げ出してほんごうによかつた、この間だつて、まるでおぢいさんに後から追ひかけられて、擱まつては大變だこいふ風に急いで駆けてゐたではないか、なごこ云ひ合ふのだつた。ただ一人、ペーテルの旨のおばあさんだけは、決しておぢいさんの悪口を云はなかつた。紡ぎ仕事を頼みに來たり、仕上つたのを取りに來たりする人々に、おぢいさんがさんなにあの子をいたはり可愛がつてゐたか、又自分達にもさんなに親切にしてくれたか、この小屋だつて、今時分はきつこ倒れてしまつてゐる筈なのを、おぢいさんが來て、すつかり繕つてくれたのだこ、一生懸命話したが、人々はおばあさんは年をこつて善<sup>もつ</sup>碓<sup>う</sup>してゐるのだらう、目が見えないから、耳もきつこ聾<sup>もう</sup>なんだらうこいつて、相手にしなかつた。

おぢいさんは、もうおばあさんの所へも行かなくなつた。旨のおばあさんには、又悲しい退屈な日がつゞき、あけくれ愚痴つばくくゞくゞつづやくのであつた。

「あゝあゝ、ハイデッが行つてしまつてからは、

私には何の樂しみもなくなつた。神様さうぞも一度だけ、死ぬ前にあの子に會はせて下さいませやうに」

(七六頁よりつゞく)

本當によい夏休みであつたこ感謝してゐる。あの雨の降る中を一本の傘に濡れながら、松本さんこ二重橋の前まで歩いて、宮城を遙拜した時の氣持は忘れられない。

靜岡では久能山から三保へこ歩いたが、樂しみにしてゐた富士の姿を近くに見せて貰へなかつたのは残念であつた。

東京へは毎年行き度いし、行かねばならぬこ思ふ。栗屋さん初め潑刺した東京の方々には御目に掛るこ、自分も少しは若返つた様な氣になつてゐる。

こんな田舎にちつこしてゐるこ、汽車から迄阿呆こ笑はれる。私達は本當の阿呆になつて了ふかも知れぬ。瓦房店には停車しない特急アジアが、ゴウアーンこ通過するのを、あほーてんこ云つて通つてゐるのだこ笑ひばなしになつてゐる。